

母子画における身体接触 発達の視点からの文献研究

中京大学心理学部 馬場 史津

Depictions of physical contact in Mother -and- Child Drawings: Literature review from a developmental perspective

BABA, Shizu (School of Psychology, Chukyo University)

Mother -and- Child Drawings was devised by Gillespie. When using this technique, the only instruction given is "draw a mother and child." The typical drawings produced by university students was reported, but no reports have described the typical drawings produced by infants and primary schoolchild.

Saito (2009) analyzed the mother and child drawings produced by 50 infants. Among these children, 90% produced a picture that could be categorized as [non-contact]. Furthermore, Seki (2012a, 2012b) investigated depictions of contact among the drawings produced by fourth and sixth graders. Among these children, [non-contact] was observed in approximately 70% of the drawings, and these children did not draw handholding. These drawings featured depictions of daily life. Among university students, typical drawings depicted [physical contact], and the drawings were considered to represent the ideological image of mother and child. It is important that these differences in development stage could be identified based on interpretations of Mother -and- Child Drawings.

Key words: Mother -and- Child Drawings, developmental stages

はじめに

Gillespie が 1989 年に発表した母子画は「お母さんと子どもの絵を描いてください」と教示する描画法である。Gillespie (1994) は、数例であるが幼児から高齢者までの母子画を紹介し、また発達の問題を有した子ども、精神疾患の成人を含めた臨床例を報告しながら、母子画の臨床的利用を提唱している。対象関係論を背景とする Gillespie は、母子画に表される自己は「母子のつながりを通して人生の最早期に発達すると思われる自己」であると述べ、母子画に描かれた母親像と子ども像の関係性は、描き手の自己と他者の関係を象徴すると仮定される。筆者は心理療法のインテーク面接で母子画を実施することで、クライアントの「他者のイメージ」「他者との関係性のイメージ」を理解する手掛かりが得られると考えている。クライアントにとって他者は怖い人なのか、信頼関係を築くことができる相手と捉えているのかについての情報が得られれば、ひいては心理療法におけるセラピストとの関係性の見立てにも利用できる。

一般的に描画の解釈は、発達の・知的側面や神経心理学的側面を確認したうえで行われる。母子画においては、これまでの人物画の知見を利用して前述の側面をある程度確認することができるが、描き手の関係性の描写が発達のどのように変化するのは十分に検討されているとは言えない。我が国の母子画の基礎研究としては、大学生を対象とした研究(馬場, 2003; 松下・岡林, 2009)などが研究論文として発表され、筆者は大学生の標準的な表現について報告した(馬場, 2005)。一方、幼児や小学生の母子画は、修士論文で母親の養育態度や抑うつ、自尊感情と母子画の関連について調査されているが(斎藤, 2009; 牟田口, 2004; 関, 2013)、それぞれの時期の標準的表現は明らかにされていない。そこで本研究では、母子画の描画指標の中でも【身体接触】の指標を取り上げ、これまでの研究成果を改めて検討し、発達の視点から標準的表現を明らかにすることを試みたい。

母子画の身体接触

母子画は比較的新しい描画法である。そこで、実

施法や描画指標としての【身体接触】について簡単に説明する。

1. 母子画の実施法

母子画は、A4の用紙と鉛筆を準備し、「お母さんと子どもの絵を描いてください」と教示する。描画後の質問に特に決まりはないが、筆者は描画についての説明を求めながら、母子の年齢や子どもの性別、母子が考えていることなどを質問している。

2. 【身体接触】の分類

描画の解釈は全体的な印象に注目しながら、描き手独自の特徴を見つける作業である。熟練した検査者であれば、経験的に特徴をピックアップし、解釈につなげることができる。しかしながら、新しい描画法の分析や初心者の場合には統計的資料に準拠することが望ましい。そこで、筆者の基礎研究では母子画の描画指標として【母子像の種類】【子ども像の数】【形態】【サイズ】【表情】【身体接触】【アイコンタクト】を設定し、出現頻度を明らかにしている(馬場, 2005)。なかでも【身体接触】は母子像の関係性を読み取るうえで客観的な判断が可能であり、出現頻度が健常群と臨床群では異なることが明らかになっている意味でも、母子画における重要な指標と考えている。

【身体接触】は図1のように【手をつなぐ/抱く

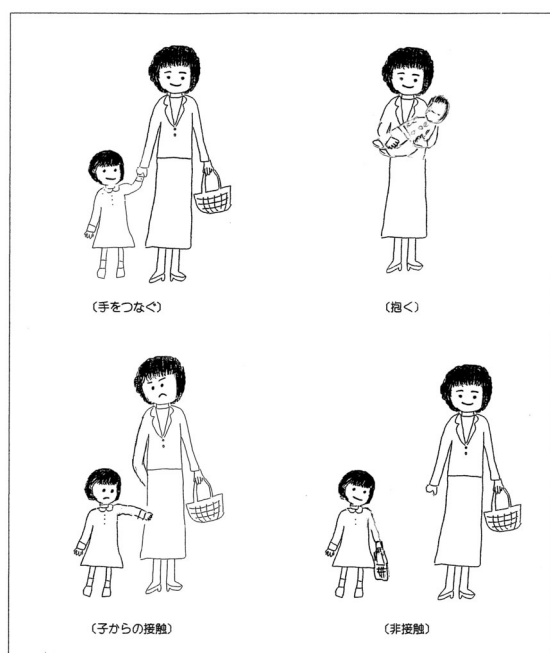


図1 【身体接触】表現型の例

／子からの接触／非接触】の四つの表現型に分類される(馬場, 2005)。分類の目安として【手をつなぐ】は、母親と子どもが手をつないでいるものに加え、母子が互いに寄り添って肩が触れ合う、頭をくっつけ合うものなども含まれる。【抱く】は、基本的に母親が子ども(乳児)を抱いている絵であるが、母親が子どもの肩を抱いていたり、母親が子どもの世話をしているような、主に母親から子どもに触れるアプローチをここに含めている。馬場の分類では'おんぶ'もここに含まれる。【子からの接触】は、子どもは母親に触れているが、母親は子どもに触れようという動きのないものと定義し、子どもが母親の洋服や腕につかまっているような場合をここに分類した。【非接触】は、母親と子どもの間にまったく身体的な接触がないものとした。この分類は、出現頻度を参考にしながら、コミュニケーションの方向性【母⇄子/母子/子母/なし】の視点から作成されており、【アイコンタクト】や、描画後の質問の母子像の思考とも共通するものである。また【手をつなぐ】【抱く】【子からの接触】をまとめて【身体接触あり】と呼んでいる。

他にも松下・石川(1999)は、【距離】を描画指標として【内包:母の身体に子どもが含まれる】、【抱擁:抱っこ】、【密着:おんぶ】、【接触:手をつないでいる】、【分離:全く身体接触がない】の表現型に分類している。この研究では、小学生112名、中学生178名、大学生92名を対象に調査がなされているが、学齢間の有意差検定の結果が記載されているだけで、小学生・中学生においてそれぞれの表現型がどの程度出現したのかは明らかにされていない。

また、松下・岡林(2009)は、【手のみの接触:手をつなぐなど】【抱きしめる:密着度の高いもの】【膝で抱える:抱きしめるのではなく、母親が子どもを膝で抱えている】【なし:接触がない】に分類しているが、この論文でもそれぞれの出現頻度は示されておらず、独自の分類である【膝で抱える】がどの程度出現したのかは明らかではない。

斎藤(2009)は女子大学生215名を対象にした調査で、馬場の分類に【接触あり:おでこをくっつけていたり、腕を組んでいるもの】、【おんぶ】、【母からの接触:母親から子どもを積極的に誘導しているような描画】を加えた7つの表現型に分類し、【接触あり】は0.9%、【おんぶ】は9.3%、【母からの接触】は0.5%であったと報告している。

3. 【身体接触】の解釈仮説

Gillespie (1994) は母子像の身体接触が肯定的コミュニケーションを伝えると述べており、馬場 (2003) は質問紙法を用いてその点を実証し、母子像の身体接触は、心の絆 / 基本的信頼感の表現であるという解釈仮説を提案している。母子像が身体的に触れるためには、母親像と子ども像を接近させて描く必要がある。近くに存在しても安心していられること、他者を信頼する気持ちが描き手の心のなかにあることを表象しているといえるだろう。

一方で、出現頻度が少なく統計的に実証されるものではないが [子からの接触] の意味は [手をつなぐ] [抱く] とは異なることが十分に予想される。また、[非接触] の場合にも、笑顔で見つめ合う絵や、二人が同じ作業をしたり何かを共有していれば、そこには交流があるとみなすこともできる。実際の解釈では、母子像のコミュニケーションの様子、表情や行動の矛盾などに注目するわけであるが、臨床群では【身体接触】の出現頻度が少ないことも明らかになっており、【身体接触】は重要な描画指標の一つである (馬場, 2005)。

幼児・小学生・中学生を対象とした研究

1. 幼児の研究

Gillespie (1994) は、幼児期の特徴として母と子どもの像をきわめて似通った姿で、通常は横並びで、そして手が触れる距離で描くことを述べ、6歳から8歳までの子どもたちの絵を紹介している。8例の描画のうち、いわゆる手をつなぐ母子像は3例であるが、Gillespie の解説を読むとこれらの絵が幼児期の典型的な絵ではないようである。我が国では斎藤 (2009) が年長児 50 名の母子画を分析し、[非接触] が 92% (46 名)、[手をつなぐ] が 8% (4 名) であったと報告している。

2. 小学生・中学生の研究

牟田口の研究

牟田口 (2004) は小学生における母親の愛着と抑うつとの関連を調べる目的で、小学2年生から6年生までの900名を超える児童を対象とした研究を行っている。その結果、高抑うつ群 (101 名)、低抑うつ群 (119 名) の間に差は認められず、どちらも [身体接触あり] が約 20% の出現率であった。また、

高抑うつ群の性差 (男子 43 名、女子 58 名) を比較した結果、女子では 27.6% (16 名)、男子では 11.6% (5 名) の出現率となり、女子に [身体接触あり] が多い傾向がみられたと報告している。

この研究は小学生を対象とした非常に規模の大きい研究である。しかしながら、学年ごとの結果が記されていない。小学2年生と小学6年生では描画の発達に差が認められるため、学年ごとの比較がまず必要である。そのため、小学生の資料として活用することが難しい。

西本の研究

西本 (2005) は小学3年生から6年生の321名を対象として母子画を実施している。母子画は、印象分析によって「不安」「怒り」「支配的」「寂しさ」「幼さ」「楽しさ」「白紙」に分類し、学年が上がるにしたがって「怒り」が多くなる傾向、「不安」が6年生に急速に増える傾向がみられたと述べている。西本の研究では、描画指標の記載はみられず、小学生の典型例も示されていない。しかしながら、手はつないでいるが母子像の顔に目鼻の描かれなかった例など5例について、担任教師による分析と母子画の印象、描画後の話合いの内容が紹介されている。

関の研究

関 (2013) の研究は小学生の自尊感情と対人場面における反応特徴の関連について、社会場面反応調査と母子画を用いて検討した研究である。小学4年生、6年生の児童152名を対象に、児童期の自尊心尺度を用いて自尊感情高群・低群を抽出し、母子画の特徴を比較している。

その結果、母子画の【身体接触】は、自尊感情低群男子 (11 名) は全員が [非接触] であった。一方、自尊感情低群女子 (19 名) では [非接触] が 8 名 (41.1%) にとどまり、[抱く]、[子からの接触] がみられ、過剰な身体接触が多い傾向にあったと報告している。この点について関 (2013) は、女子は他者と関わるうえで生じる不安はあるものの、他者から離れることにより不安が募るため、不安を埋めるために他者と接触することを選んでいると考察している。さらに、自尊感情が高い小学生の母子画の特徴として「実際にあった場面を描いた子どもたちが多かった」ことを挙げている。

松下・石川の研究

松下・石川 (1999) は、小学生群 (112名)、中学生群 (178名)、大学生群 (92名) を対象に母子画を実施し、[内包] [抱擁] [密着] [接触] [分離] の出現率を学齢別、男女別に分析した。その結果、男子では [内包] [接触] [分離] において、女子では [抱擁] [分離] において学齢間に有意差が認められたと報告している。実際にどのような出現頻度であったかは示されていないが、男女とも年齢の上昇につれて、[接触] [抱擁] が増えるとの記述があることから、小学生のほうが [分離]、つまり馬場 (2005) の分類では [非接触] に相当する絵が多い結果だったものと推測される。また、関 (2013) と同様に、小学生では単純で現実的な母親を描こうとするが、中学生群、大学生群になるにつれて過去のイメージや一般的な母親概念を描くとも指摘しており、小学生の母子画は、現実的な場面が描かれやすいと思われる。

身体接触の発達的变化

筆者がこれまでに確認できた母子画の研究について、馬場 (2005) の分類に基づく幼児・児童・大学生の身体接触の出現頻度を表1に示した。児童の資料は、関 (2012b*) より自尊感情中群のデータ提供を受け、関 (2012a) の資料と合わせて筆者が作成した。

1. 幼児の母子画

斎藤 (2009) の研究により、幼児の母子画では [非接触] が92%を占めることが示された。斎藤が対象とした年長児は図式期の描画段階にあると考え

られ、形がパターン化することや、基準となる地面の線を引き、その上に家や木や花や人を並べて描くことが特徴である (東山・東山, 1999)。山尾・田中 (2004) は、5歳児と小学1年生の動的家族画を5つの描画水準に分類して数量的な分析を行った。その結果、5歳児の動的家族画は手足が分化して人間らしく描かれているが、羅列的で何をしているかは読み取れない水準3が40%、羅列描写もまだ多く残されているが家族が何かをしているところを表現しようとして、家族みんなでの活動が描かれている水準4が50%であったと報告している。山尾・田中の分類を幼児の母子画にそのまま適用することはできないが、母子画においても同様の水準の絵が多いことが推測される。

つまり、幼児の母子画では母親像と子ども像が似たような形で羅列的に描かれ、母子を関係づけるような表現がないことが標準であると考えられる。斎藤 (2009) が母親の統制的態度が高い幼児の母子画にのみアイコンタクトのある絵が出現したと報告していることも併せて考えると、必ずしも濃密な関係性を連想させる表現が望ましいとは言えない。幼児にこのような表現が見られた場合は、描画の発達が促進されているサインである可能性や、母親の統制や関係性への強い希求を表現している可能性を検討してみる必要があるであろう。[非接触] の表現は描画の発達によるところが大きいですが、幼児では母親を安全基地として離れることができるような安定した愛着がある場合に、むしろ羅列的に表現されるということも考えられるかもしれない。

一般的に幼児の母子画が [非接触] であったとしても、幼児と母親の関係が希薄なわけではない。子どもたちに絵の説明を求めると「ママと～～してい

関, 2012a, 2012b

表1【身体接触】の出現頻度の比較

		抱く	手をつなぐ	子から	その他	なし
幼児	年長児 (斎藤, 2009) N = 50	0 (0)	4 (8.0)	0 (0)	0 (0)	46 (92.0)
児童	小学4年生 (関, 2012a・b) N = 73	2 (2.7)	13 (17.8)	0 (0)	2 (2.7)	48 (65.8)
	小学6年生 (関, 2012a・b) N = 75	2 (2.7)	14 (18.7)	1 (1.3)	1 (1.3)	54 (72.0)
大学生	馬場 (2005) N = 570	130 (22.8)	313 (54.9)	6 (1.1)	0 (0)	121 (21.2)
	三崎 (2009) N = 138	16 (11.6)	67 (48.6)	1 (0.7)	0 (0)	54 (39.1)
	斎藤 (2009) N = 215 女子のみ	52 (24.2)	77 (35.8)	1 (0.5)	23 (10.7)	62 (28.8)

数値は出現頻度；()内は% 斎藤 (その他: おんぶ 9.3%)

* 関安寿佳 2012b 私信

るところで」と関係性に言及することも多く、日常生活のやりとりの様子や、母親との体験を通じて子ども自身が感じている関係性のイメージが伝わるようなストーリーが語られる。Gillespie (1994) は「どの年齢でも、母親像と子ども像の位置関係は、ほどよく接近していて (片腕が伸びたとして、ほぼ接触可能な距離の範囲)、二つの像が並んでいたり、あるいは母親が子どもを抱いていた、世話をしている姿が鮮明に表れる」と述べている。幼児の場合には【身体接触】だけでなく、【母子像の距離】といった指標を設定することが必要であり、描画についての説明を十分に聞くことが解釈の前提となると思われた。

2. 小学生の母子画について

関 (2012a, 2012b) の資料から、小学4年生、6年生では [非接触] が約7割を占めることが明らかにされた。藤本 (1979) は高学年になると運動姿勢なども描けるようになると報告しており、幼児のように描けないのではなく、小学4年生、6年生は手をつなぐ絵を描かないということが特徴と考えられた。これは大学生の資料と大きく異なる点であり、小学生では [非接触] が50%を超す標準タイプであるという観点から母子画を解釈する必要がある。

[非接触] が標準タイプとなる大きな要因として、小学生の母子画では、単純で現実的な母親を描こうとする (松下・石川, 1999)、実際にあった場面を描くことが多い (関, 2013) ことが挙げられる。小学生の中学年・高学年になれば、日常的に母親と手をつなぐことは少なくなる。「お母さんと子どもの絵を描いてください」との教示に対して、大学生のような観念的な母子のイメージではなく、現実の自分と母親の体験を描けることが肯定的な関係にあることを示すサインであると思われる。逆にいえば、現実の絵が描けない場合、[身体接触あり] の絵が描かれる場合には、非現実的な母子像を描かざるを得ない理由や描き手の関係性のイメージについて、注意深く検討する必要がある。

筆者は大学生の研究から、母子画には描き手の母子関係そのものではなく、自己と他者の関係性のイメージが投射されるとして、「あなたとあなたの家族」を描くように求める家族画とは異なる描画法であると考えている。しかしながら、小学生の母子画にはより現実的な母子関係が表現されることが示された。そのため、小学生の母子画は家族関係のなか

の母子関係に特化した情報が得られる描画法と位置付けられるのではないだろうか。

3. 大学生の母子画について

大学生の母子画では、三崎 (2009) の研究は [非接触] が約4割と多いものの、[身体接触あり] が [非接触] よりも多いという点では馬場 (2005) や齋藤 (2009) の研究と共通している。大学生においては、これまで通り [身体接触あり] が標準的な母子画であるとみなしてよいだろう。

三崎 (2009) は大学生を対象にして、質問紙法の対象関係尺度 - 青年期用と、投射法であるTATを用いて協力者の対象関係を評価し、母子画との関連を明らかにする研究を行っている。その結果、[手をつなぐ] 母子像を描いた大学生が、その他に分類された場合よりも異性関係において性的関係や攻撃心の対処の仕方がより適応的であると報告している。三崎の研究はサンプル数が少ないため、今後の検証が必要であるが、大学生の場合には、[手をつなぐ] 横並びの関係性が基本的には適応的であることを示唆するものであろう。また、松下・岡林 (2009) は一般他者版 ECR 尺度と母子画の分析から、「親密性回避が低い人は、手のみで触れる表現が多い傾向がみられた」と報告している。松下・岡林は、Gillespie (1994) の母親像は成熟した自我を、子ども像は inner child を表すとの仮説を受けて、母子像の接触による密着の程度は、自我の分化の度合いを示唆すると考えることもできると述べている。

大学生の母子画では、現実の自分と母親を描くことは非常に少なく、「お母さんと子どもの絵を描いてください」との教示を受けて、「母と子どもの関係とはこういうもの」というイメージが浮かぶことが一つのポイントとなる (馬場, 2005)。逆に現実の自分と母親を描いた臨床例からは、状況にあわせて一時的に退行したり回復させる自我の柔軟性が乏しさが示唆される場合もある (馬場, 2008)。東山・東山 (1999) は絵の表現形式を「写実的表現」「象徴的・記号的表現」「心象的表現」に分類しているが、小学生の母子画はより現実の母子関係をそのままに描く「写実的表現」に近く、大学生の母子画はさまざまな体験を通して形成された母子に関する「心象的表現」といえるかもしれない。母子画は、この点に留意して解釈することが重要であり、それによって臨床的に活用できると考えられた。

おわりに

従来、筆者は大学生では母子像の間に身体的な接触が描かれることが標準的表現であり、他者への信頼感を示すサインであると述べてきた。今回、幼児や小学生の研究と比較することにより、発達段階によってその意味が異なることが示唆された。高橋・高橋（1999）は描画像の図式として、描かれた人物像が自己像なのか、重要な人物像なのか、人間一般の像なのか、絵の重複決定性の性質にも配慮した理解が必要であると指摘している。母子画においても、母子像というテーマに由来する親子関係の発達の側面を考慮しつつ、また現実にあった場面なのか、理想像なのか、あるいは描き手の体験に基づく母子のイメージなのかなど、丁寧な描画後の質問を実施し、描き手の背景と照合しながら解釈することが必要になる。

今回は中学生・高校生の標準的な母子画に言及した論文を見つけることができなかった。[身体接触あり]が50%を超える時期を明確にすることは、今後母子画を活用するうえで重要な研究となるだろう。また、描き手が現実に幼児の子どもがいる母親の場合、さらには妊婦や子どもを出産したばかりの描き手は母子画をどのように表現するのにも興味深いテーマであり、そのような研究も行われている（有村，2005；増田，2014；櫻井・和田・河野，2014）。筆者の臨床経験では、現実に幼児の子どもがいる母親であっても、意識的には母親像に同一化しながら、描き手のもつ母子のイメージが投映されるように思われる。しかしながら、妊娠中の母親や子どもを出産したばかりの母親では、大学生とは異なる表現がなされ、それぞれの描画指標の解釈が異なる可能性も十分に考えられる。そのような分野での標準化も今後の課題といえよう。

引用文献

- 有村美和 2005 母子画の研究 母親になったばかりの女性の描画表現について 東京国際大学臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 2004年度修士論文 未公刊
- 馬場史津 2003 母子画の基礎的研究 - 成人版愛着スタイル尺度との関係から - 臨床描画研究, 18, 110-124.
- 馬場史津 2005 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- 馬場史津 2008 母子画による心理療法過程のアセス

- メント - 3枚の母子画の比較 臨床描画研究, 23, 196-211.
- 藤本浩一 1979 運動姿勢描画の発達の研究 教育心理学研究, 27, 245-252
- Gillespie, J. 1989 Object relations as observed in projective Mother-and-Child Drawings. The art in psychotherapy, 16, 163-170.
- Gillespie, J. 1994 The projective use of mother and child drawings: A manual for clinicians. Brunner/Mazel. 松下恵美子・石川元(訳) 2001 母子画の臨床応用 - 対象関係論と自己心理学 - 金剛出版
- 東山明・東山直美 1999 子どもの絵は何を語るか 発達科学の観点から 日本放送出版協会
- 増田真由美 2014 乳幼児を持つ母親の育児不安と内的対象関係について - 育児不安類型からみた母子画の特徴 - 駒沢女子大学人文科学研究科 臨床心理学専攻 平成25年度修士論文 未公刊
- 松下姫歌・岡林睦美 2009 青年期における愛着スタイルと母子イメージとの関連 質問紙法と母子画を用いての検討 広島大学心理学研究, 9, 191-206.
- 松下美恵子・石川元 1999 母性意識と母子画に描かれた対人表現との関連について 臨床描画研究, 14, 43-55.
- 三崎千鶴子 2009 母子画と対象関係の関連 札幌学院大学大学院 臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 修士論文 未公刊
- 牟田口孝子 2004 児童期における抑うつと母親との愛着の関連 母子画に表現される母親との愛着を通して 久留米大学心理学研究科 臨床心理学専攻 平成15年度収支論文 未公刊
- 西本里美 2005 問題をもつ子どもへのカウンセリング的対応を学ぶ - 気がかりな子どもの「心の危機」への気づきとそのかわりについて - http://www.kochinet.ed.jp/center/research_paper/h17_foreign_students/2.pdf
- 齋藤みどり 2009 母子画による母と子の関係性の調査研究 ~ 愛着から見る意識・無意識的側面 ~ 駒沢女子大学人文科学研究科 臨床心理学専攻 修士論文 未公刊
- 櫻井薫・和田佳子・河野千佳 2014 妊婦および褥婦による母子画の特徴 女性心身医学, 19, 100.
- 関安寿佳 2012a 子どもの自尊感情と対人場面における反応特徴との関連 - 母子画を用いての検討 金城学院大学大学院人間生活学研究科 人間発達学専攻 臨床心理学分野 修士論文 未公刊
- 関安寿佳 2013 子どもの自尊感情と対人場面における反応特徴との関連 - 母子画を用いての検討 日本描画テスト・描画療法学会第23回大会抄録集
- 高橋雅春・高橋依子 1999 人物画テスト 文教書院
- 山尾沙耶香・田中吉資 2004 幼稚園5歳児及び小学1年生の動的家族画：発達と家族への思い 香川大学教育実践総合研究, 9, 101-114.